

東広島市における住民の景観意識と景観保全

— 赤瓦景観を中心として —

岡 橋 秀 典

【キーワード】 景観意識・景観保全・景観政策・赤瓦・東広島市

I. はじめに

近年、国の景観法の施行（2004年12月）を契機に、景観政策への関心が高まりをみせている。この法律は、都市、農山漁村等における良好な景観の形成を図るため、景観計画を策定し、また景観計画区域、景観地区等において良好な景観を形成するために規制を実施し、景観整備機構による支援等も行うというものである。これまでの都道府県や市町村の景観条例と比べると、法的な規制力が強化され施策もより体系的になっている。また、これまで自治体が制定した景観条例の基本理念や規制などに法的根拠を与える基本法でもある。このようにわが国の景観政策をめぐる法的状況は、従来と比べものにならないほど整備されてきたと言えよう。

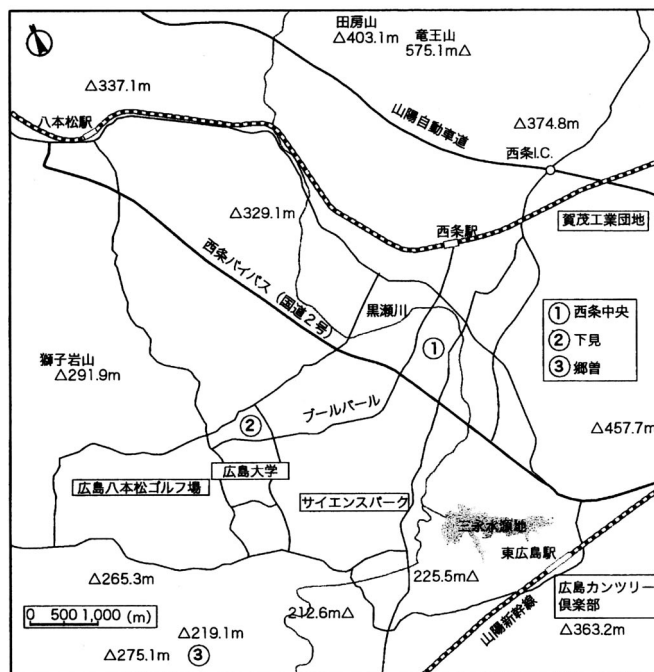
しかし、現実の景観保全問題がこれで大きく前進するかどうかというと、事態はそれほど単純ではない。果たして、このような法的規制を含めた景観保全がわが国の諸地域で住民から受け入れられ、効果を発揮しうかがが問題となる。重要伝統的建造物群のように希少性の高い景観であれば合意は可能かもしれないが、そのような指定がなされないような景観の場合、果たしてどのような保全の可能性があるだろうか。わが国の景観保全問題は、むしろこうした一般的にみられる地域でこそ積極的に検討される必要がある。

こうした問題意識に立つて、本稿では、赤瓦の景観を中心に固有の景観を有する東広島市を対象に、景観に対する住民の評価、景観の保全に関する住民意識、景観を支える構造などを総合的に検討し、そのことを通じてこの地域の景観保全問題の特質を明らかにし、さらに今後の保全の方向性を提示することを目的とする。東広島市を対象としたのは、急速に都市化が進み景観の改変が進んでおり、景観保全について早急な対応が求められていると考えるからである。東広島市の景観については、既に脇本（1998）の赤瓦景観に関する貴重な研究がある。本稿ではその結果をふまえながらも異なる視点と調査方法により検討を行うことにしたい。また、山本ほか（2005）も東広島市を対象に住民の景観選好特性を分析しているが、方法論の提示に主眼があり、地域景観の検討は十分になされていない。

研究の方法は、主に、住民の景観評価や景観保全に関する意向を把握するためのアンケート調査（「東広島市の景観とその保全・整備に関するアンケート」）によった（1997年4月に実施）。

対象者は、東広島市¹⁾の西条盆地の3地区（第1図の西条中央、下見、郷曾）から電話帳を用いてランダムサンプリングを行い選定した。したがって、本稿の対象とする地域は東広島市の中でも西条盆地に限られる。上の3地区を選んだのは都市化の度合いに差があるためで、その違いがどのように景観保全に関わるかを明らかにすることができると思ったからである。西条中央は、西条駅にもっとも近く、新規に土地区画整理事業により開発された新興住宅地区である。下見は純農村であったが広島大学の立地により近年急速に都市化され、農家と非農家の混住化が顕著である。郷曾は3地区でもっとも純農村的色彩を残す地区である。各地区ごとに100人ずつ、計300人を選び、アンケートを発送した。その結果、133人からの回答を得た。回収率は44.3%であり、この種の郵送アンケート調査としては良好な結果であった。このこと自体が住民の景観問題に関する関心の高さを証明している。地区別の回収率は西条中央が52%、下見43%、郷曾37%で、都市化が進んだ地区ほどやや高い傾向がみられる。

アンケート回答者の属性を簡単に紹介しておく。性別は男が90%で大部分を占める。年齢は20歳台から70歳以上まで広く分布するが、40歳台が28%、50歳台が19%、60歳台が23%と多く、この年齢層で70%を占める。職業は、第1表の通りであるが、会社員が34%を占めもっとも大きな割合を占め、年金生活者・無職が17%、公務員が14%と続く。住宅は、89%が1戸建て持家である。出生地は、約50%が東広島市内、その他の広島県内が32%、県外は20%弱であり、本市内お



第1図 対象地域の概観

第1表 アンケート回答者の地区別職業分布

単位：人

	会社員	公務員	企業 経営者	農 業	その他 自営業	年金生活 者で無職	学 生	その他	不 明	総 計
西条中央	16	9	3	1	8	12	1	2		52
下 見	17	5		5	4	7	2	3		43
郷 曾	12	4	3	6	3	3	2	2	2	37
不 明						1				1
総計	45	18	6	12	15	23	5	7	2	133
	33.8	13.5	4.5	9.0	11.3	17.3	3.8	5.3	1.5	100.0%

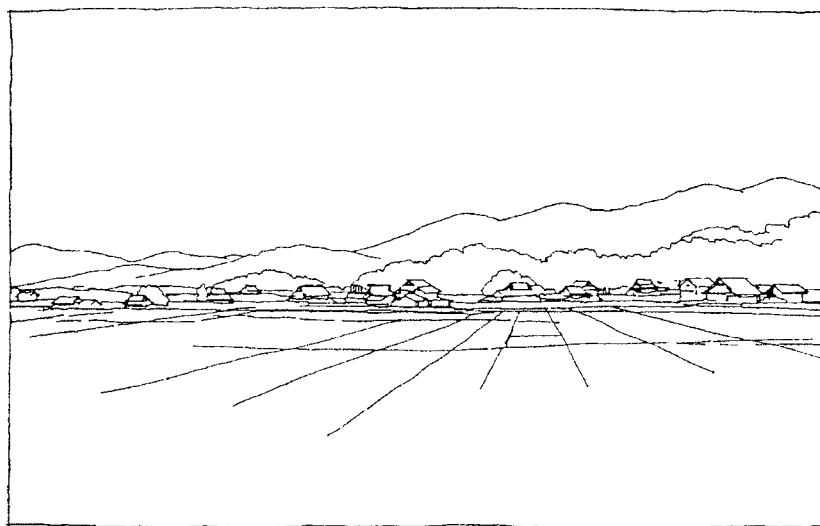
資料：筆者実施の「東広島市の景観とその保全・整備に関するアンケート」（1997年3月）

よび広島県内が多い。戦前から東広島市内の現在地に住む者が40%弱あり、旧住民が多く含まれている。今後の定住志向は全般的に強い。「ずっと永く住みたい」が60%を超え、「当分は住みたい」の20%を大きく上回る。農家・非農家の別では、農家（農地を所有する家）が36%を占め、一定の割合を占めることもこの地域の特徴である。

II. 東広島市の景観構成とその特色

1. 東広島の典型景観

東広島市は、西条盆地、志和盆地など、いくつかの盆地から成る。景観上もその影響を受け、程よいスケールで、しかもまとまりのある落ち着いた景観を呈している。それは、盆地の周囲を囲む山々や里山のアカマツ林を背景に、赤瓦と白壁の建物が点在し、その手前に水田が広がる、



第2図 東広島市の「典型景観」

出典：都市環境研究所（1980）

という景観である。都市環境研究所（1980）はそれを東広島市の「典型景観」と呼び、助実地区をモデルとして第2図のように描いた。

2. 景観を構成する自然的要素

この地域の景観を構成する主な自然的要素をあげると、遠景として、盆地を取り巻く周囲の山並みがあり、中景として、盆地の中に点在する里山、水田、ため池、河川などがある。まず、盆地を囲む山並みは景観の背景の役割を果たし、突出した山が存在せず、連続していることから、落ち着いた景観の形成に寄与している。これらの山並み以外に景観の背景要素として、中景としてあげた里山もある。里山の樹林はアカマツ林が多く、この植生もこの地域の景観を構成する重要な要素である。水田は農業生産活動の場であるため四季により表情を大きく変えることが特徴である。春から秋の稲作期に対し、冬場は作付けがなく、季節によるコントラストが激しい。ため池は東広島でよくみられる景観である。この地域は降水量が少なく、大きな河川もないため、早くから灌漑用ため池が築造されてきた。河川については、黒瀬川をはじめ規模が小さいものが多く、景観を分断するほど大きな影響を与える要素とはなっていない。人工改変が加えられた自然的要素として目立つのはゴルフ場であり、市内に7カ所見られる。しかし、大部分は樹木に囲まれ、また人目に触れにくい場所に開発されていて、景観への影響は比較的小さいといえる。

3. 景観を構成する人文的要素

次に、この地域の景観に大きな影響を与えている人文的要素をみる。東広島市では、広島大学をはじめとする大学の移転、自動車関連を中心とした工場の進出、住宅団地の開発などにより急速に都市化が進み、土地利用の変化と人口増加が著しい。

まず目立つのは、山陽自動車道や国道2号線（バイパス）、山陽新幹線などの、高架の交通施設である。直線で連続している上に、色彩的にも目立ち、他の景観要素の連続性を遮断するものとして地域景観への影響は大きい。次に、昭和30年代から誘致されてきた工業団地がある。丘陵や山地を造成したもので、平地からみてわかりにくいものもあるが、建物が大規模で、一般の住宅とは建築様式・色彩とも異なること、背後に大きな法面が形成されることが多いこともあり、景観上大きな要素となっている。また、密集した住宅地もまた大きな要素となっている。各駅前を中心に広がる市街地のほか、東広島ニュータウン（高屋町）や日興園団地（八本松南）などの大規模住宅団地、そのほか数多くの小規模団地が造成されており、既存の集落とはまったく異なるタイプの景観を形成している。しかし、計画的に開発された大規模住宅団地の場合は、周囲の林地を残し周囲の景観を大きく攪乱しないような配慮がなされていることが多い。むしろ景観への影響の大きいのは、農村地域にスプロール的に建てられた住宅群であろう。広島大学周辺の学生アパート群の一部もこれに該当する。最近では、市街地で高層マンションの建設が増加してき

ており、これらも景観に影響を与える新たな要素として重要性を増している。

この地域独自の景観を形成している最も大きな人文的要素として、赤瓦の屋根と白壁の住宅がある。この地域独特の「居蔵造り」とよばれる大規模で豪壮な住宅は農村部に多い。母屋以外に、蔵、納屋、はなれなどを配し、白塀で囲んでいる。そのいずれにも赤瓦が葺いてあるために、この地域の特徴的な景観をとなっている。赤瓦の住宅数が多いだけでなく、このように住宅の、特に母屋の屋根面積が大きいことから、赤瓦が地域景観にもたらすインパクトは強い。

西条は酒造地として知られるが、中心市街地の旧山陽道沿いに酒蔵が立ち並ぶ景観がみられる。東広島市は酒まつりなどのイベントとともに、この酒蔵通りの景観を活用して観光客の誘致を図ろうとしている。

東広島の景観は色彩からみた場合に大きな特徴をもつ。典型景観である山並－赤瓦の組み合わせは、アカマツの緑とその赤い樹皮の関係を明度彩度ともに低下させた関係に対比できる（都市環境研究所、1980）。つまり、山並と赤瓦の色彩は、アカマツの緑と樹皮の赤を平行移動させたものであり、アカマツ林の中で眼に映る色の配合関係になっている。このことは、赤瓦が安定した自然環境の基調色であり、そのため落ち着いた景観の形成に寄与していることを意味する。これに対し、青瓦の場合は、明度彩度ともに大きく、自然の景観色の中で安定した色彩ではないため、景観的に浮き立つことになる。

ちなみに、広島大学キャンパスの建物の色彩は、周囲の景観になじむことに配慮され、外壁にはアカマツの樹皮の色に対応した茶系色が採用されている。ただ、図書館などの全学共通施設だけは外壁が白であり、周囲の景観との調和という点ではやや問題がある。

III. 住民の景観選好と赤瓦景観

1. 景観選好

前章で対象地域の景観構成の特徴をみたが、こうした景観は住民によってどのように評価されているのかを、景観選好という形で調べてみた。すなわち、日頃目にしていると思われる主な景観（設問では景色と表現）を提示し、それらから好むものを複数回答可で答えてもらう形をとった。15項目をリストアップし、それ以外にもあれば、「その他」として具体的に記述できるようにした²⁾。

その結果を選好の多いものから順に並べたものが第2表である。もっとも多いのは「遠くに見える山並みの景色」で、60%強の人が支持している。これに続いて、「酒蔵のある旧山陽道沿いの景観」、「赤瓦屋根の農村景観」、「西条駅付近から広島大学へ伸びるブルーバールの景観」が50%台後半で並ぶ。そして、これらより少し支持が下がるが「一面に広がる水田の風景」も50%弱に達している。

以上は、いずれも回答者の半数以上が好むとしているから、市民の最大公約数的な景観選好と

第2表 東広島市の好きな景色（複数回答可）

順位	景色の内容	好きな景色（複数回答可）	
		回答者数（人）	支持率（%）
1	遠くに見える山並みの景色	85	63.9
2	酒蔵のある旧山陽道沿いの景観	78	58.6
3	赤瓦屋根の農村景観	77	57.9
4	西条駅付近から広島大学へ伸びるブルーバールの景観	74	55.6
5	一面に広がる水田の風景	65	48.9
6	点在するため池の風景	46	34.6
7	広島大学やサイエンスパークなどの近代的建物の景観	45	33.8
8	三永水源池付近の風景	35	26.3
9	赤松などからなる里山の景観	31	23.3
10	黒瀬川などの河川沿いの風景	23	17.3
11	一直線に走るバイパスの風景	21	15.8
12	田畑の中に新しい住宅やマンションが混在する景色	20	15.0
13	新しく開発された住宅団地の景観	14	10.5
14	新幹線と東広島駅周辺の風景	8	6.0
15	山陽自動車道の景色（インターと道路）	6	4.5

注：設問「次の1～15は東広島で目にする景色をあげたものです。これらの中で、あなたのお好きな景色はどれでしょうか。あてはまるものがあればいくつでも番号に○をつけて下さい。また、ここにあげた以外にもあれば、16番のその他の欄に具体的にご記入下さい。」

資料：筆者実施の「東広島市の景観とその保全・整備に関するアンケート」（1997年3月）

みてよい。その特徴を要約すると、山並み（遠景）や水田（中景）といった、この地域の大枠を作る景観、それに市街地の酒蔵通りや農村部の赤瓦景観といった特徴的な伝統景観、さらにブルーバールという近代的景観が加わるといった構成になっている。これからみると、住民の景観選好も、概ね前章で述べた典型景観をベースにしていると言えよう。すなわち、住民の多くが抱く東広島の景観像は、伝統的な農村の典型景観に、町場の伝統景観である酒蔵通りやブルーバールの近代的景観がプラスされた形で構成されている。

このほかでは、ため池の風景や広島大・サイエンスパークの景観なども30%台の支持を得ており、一定のサポートを得ている。これらに対して、先のブルーバールを除くと、山陽自動車道、新幹線、バイパス、住宅団地、混在する住宅やマンションなど、近年の開発により新たに出現した景観は支持が少ない。意外なのは、この地域にとって身近な自然である里山景観や河川景観への支持の少なさであり、20%台にとどまっている。

続いて、「特に気に入っている景色」一つだけの回答を求めた結果を検討する（第3表）。この場合は、最も支持が多いのが21%の「酒蔵のある旧山陽道沿いの景観」であり、これに19%弱の「赤瓦屋根の農村景観」が僅差で続く。この二者で合わせて40%に達するが、これらは先の複数回答可の質問でも多くの支持を集め、またマスメディアでも注目度の高い景観である。これらに対し、最初の質問で1位であった「遠くに見える山並みの景色」は12%で3位に順位を下げていく。これは、この景観が遠景を中心とした背景的性格が強いため、どれか一つとなると上記のような地域の特徴的なものが注目されることになると考えられる。ここでも開発に関わる景観はど

第3表 東広島の特に好きな景色（単一回答）

順位	景色の内容	特に気に入っている景色（単一回答）	
		回答人数（人）	支持率（%）
1	酒蔵のある旧山陽道沿いの景観	28	21.1
2	赤瓦屋根の農村景観	25	18.8
3	遠くに見える山並みの景色	16	12.0
4	一面に広がる水田の風景	15	11.3
5	西条駅付近から広島大学へ伸びるブルーバールの景観	13	9.8
6	黒瀬川などの河川沿いの風景	5	3.8
7	点在するため池の風景	5	3.8
8	広島大学やサイエンスパークなどの近代的建物の景観	5	3.8
9	赤松などからなる里山の景観	4	3.0
10	三永水源池付近の風景	3	2.3
11	一直線に走るバイパスの風景	1	0.8
12	田畑の中に新しい住宅やマンションが混在する景色	1	0.8
13	山陽自動車道の景色（インターと道路）	0	0.0
14	新幹線と東広島駅周辺の風景	0	0.0
15	新しく開発された住宅団地の景観	0	0.0

注：設問「今、上の質問で選んだ景色の内、あなたが特に気に入っておられるもの、あるいは大切にしていきたいと思っておられるもの一つだけ選んで、番号で記して下さい。」

資料：筆者実施の「東広島市の景観とその保全・整備に関するアンケート」（1997年3月）

れも支持がないが、そうした中でブルーバールの景観だけは10%弱の支持を集めているのが注目される。ブルーバールには、単なる通過道路にはない「象徴性」や「ファッション性」があり、それが市民を引き付けていると考えるべきであろう。第2表の場合と同様、ここでもため池、里山、河川などの景観への支持は5%に満たず、少数にとどまる。これらは身近な自然として貴重な存在であり保全すべき要素が多々あるにもかかわらず、景観としては注目が少ない。このことはこれらの景観保全を進めるにあたり住民の関心を喚起することが必要であることを示唆している。

景観の選好には、地区（調査を行った3地区）による差異がみられる。「特に気に入っている景色一つ」についてみてみよう。まず西条中央では、「酒蔵のある旧山陽道沿いの景観」、「赤瓦屋根の農村景観」、「西条駅付近から広島大学へ伸びるブルーバールの景観」への支持が他地区に比べ高い。下見地区では、赤瓦景観への支持が最も高いものの、「遠くに見える山並みの景色」、「一面に広がる水田の風景」が他地区よりも支持を集め、他方「酒蔵のある旧山陽道沿いの景観」は10%以下と極端に少ない。郷曾では、「酒蔵のある旧山陽道沿いの景観」が最も多いものの、他地区と比べて「広島大・サイエンスパークなどの近代的建物の景観」、「点在するため池の風景」が多くなっている。このような違いは、各地区の景観特性の違いを反映している。例えば、西条中央地区は酒蔵地区に近く、下見地区は広い水田地域に接し、郷曾地区は広島大の景観全体を遠望できるなどである。

年齢層によっても景観の選好に差異が認められる。「酒蔵のある旧山陽道沿いの景観」や「遠くに見える山並みの景色」の支持は年齢による差がほとんどないのに対し、「赤瓦屋根の農村景観」

は年齢が上がるほど支持率が高くなる。30歳台では7%、40歳台と50歳台は17%にとどまるが、60歳台では30%、70歳以上ではさらに上がって38%に達する。他方「一面に広がる水田の風景」は60歳以上でほとんど支持がないのに対して、50歳台以下で支持を集めている。

農家と非農家の間でも景観選好は違いをみせる、農家層では赤瓦景観の支持率が31%ともっとも高く、遠くの山並み(19%)と酒蔵通りの景観(17%)がこれに次ぐのに対し、非農家層では酒蔵通りへの支持が25%と最も高く、赤瓦景観(16%)、一面の水田風景(14%)、ブルーパール(13%)がほぼ同じ割合でこれに次ぐ。赤瓦景観は非農家よりも農家層での支持が高いことが明らかである。

以上のように、居住地域や社会属性によって景観選好には一定の差異がみられる。それゆえ、景観政策や地域づくりの過程でさまざまな葛藤が生ずる可能性がある。

2. 景観のイメージと評価

次に、こうした景観について住民が抱いているイメージと評価を検討する。ここでは漠然と東広島市の景観について問うのではなく、回答が容易なように「自宅近くの東広島市の景観」という限定をつけて尋ねることとし、セマンティック・ディファレンシャル法(SD法)による調査を実施した。この方法は、「変化に富んだー単調な」、「美しいー見苦しい」のように両極性をもつ形容詞対をあらかじめ与え、それらにそって景観に対してもつ印象を評定してもらうものである。第4表のように1から5まで5つの評点があつてそれらから選択する形をとる。どちらの形容にも偏らない平均的な評定が3(「どちらでもない」)であり、5あるいは1に向かうほどそれぞれの形容への強い肯定的評価となる。

まず強い肯定的評価が与えられている形容に注目すると(第4表)、「緑豊かな」、「変化に富んだ」、「自然な」の3つについて、「かなり」という強い肯定が25~34%に達している。さらにこれに「やや」という肯定を入れると、回答者の50%以上がこうした見解に同意ということになり、

第4表 東広島市の景観についての住民のイメージと評価

単位：%

	1. かなり	2. やや	3. どちらでもない	4. やや	5. かなり	
変化に富んだ	30.2	31.9	19.8	10.3	7.8	単調な
自然な	24.8	30.8	10.3	17.1	17.1	人工的な
美しい	7.8	40.9	28.7	18.3	4.3	見苦しい
魅力的な	6.8	28.2	43.6	14.5	6.8	つまらない
快適な	10.3	36.2	28.4	15.5	9.5	不快な
緑の豊かな	33.6	26.7	10.3	16.4	12.9	緑の乏しい
どこにでもある	9.6	27.0	41.7	10.4	11.3	他にはない
よく手入れされた	7.0	19.3	40.4	19.3	14.0	手入れされていない

注：設問「あなたはご自宅近くの東広島市の景色について、どのような印象をもっておられますか。下の対になった8つの形容詞による尺度を用いてお答え下さい。」20%以上の数値に下線を付した。

資料：筆者実施の「東広島市の景観とその保全・整備に関するアンケート」(1997年3月)

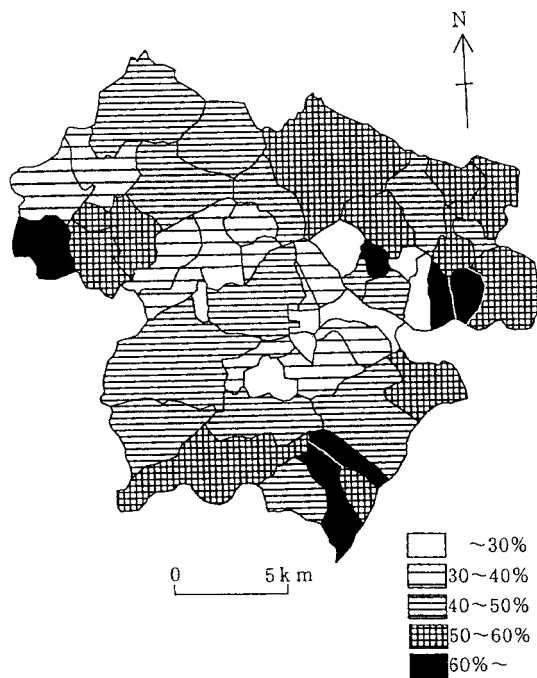
この景観イメージが住民に広く共有されていることがわかる。自然に恵まれ、変化に富み、緑が豊かというイメージは、まさに山に囲まれた盆地で、里山が分散的にあり、水田が広がる東広島市の状況を反映した見方であろう。しかし、そうした景観が、美しく、魅力的で、快適と評価されているかという点、必ずしもそうではない。第4表のように弱い肯定と判断の保留が中心となる。さらに、基本的には「他にはない」希少な景観であるというよりも「どこにでもある」一般的な景観と捉えられており、手入れについても特に行き届いていると認識されていない。

このような住民が抱く景観のイメージや評価から言えることは、多くの場合、住民が自然に恵まれている景観を高く評価する一方、そうした景観を特に魅力的で希少なものとは考えず、またそこでの人的な手入れも十分に評価していないことである。このことは、この地域の景観保全の方向を考える際に特に留意すべき点であろう。

IV. 赤瓦景観と住民の意識

1. 東広島市の赤瓦景観

ここでは、東広島市の典型景観の一部を構成し、また住民にもよく選好されている赤瓦景観に焦点をあてて、こうした景観の分布、形成過程、存続のしくみ、住民の意識と指向、行政の施策などを検討する。



第3図 東広島市における大字別赤瓦率（1992年）

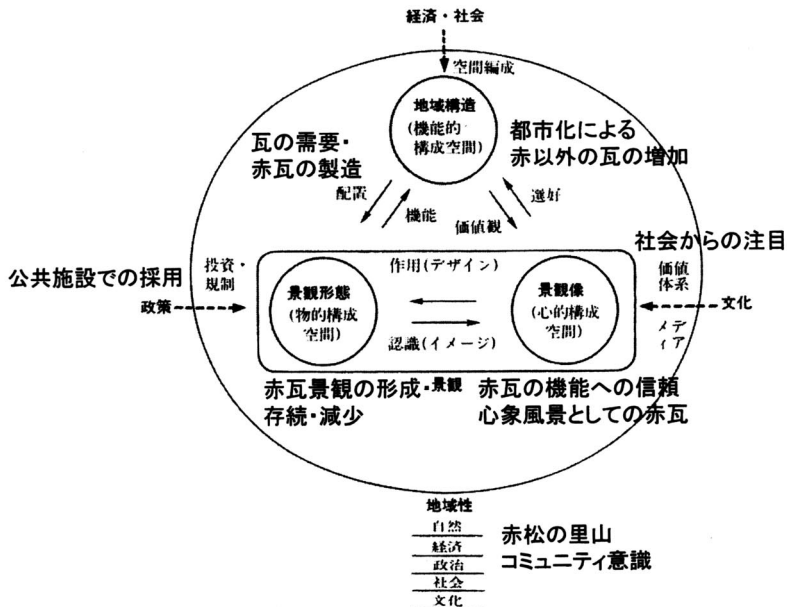
出典：脇本（1998）

第3図は、脇本（1998）が1992年の航空写真を用いて東広島市全域の建物の赤瓦の割合を算出し、地図化したものである。これによれば、総数37,310戸のうち、42%の15,719戸が赤瓦であった。旧町別に見てみると、八本松町で最も赤瓦の割合が低く（38.1%）、次いで西条町（39.9%）、志和町（45.4%）となり、最も高いのが、高屋町（4044戸/8459戸、47.8%）であった。高屋町では比較的开発が進んでない地域が多く、赤瓦の割合が高くなったと考えられる。しかし、この時点ではまだ造成段階であった東広島ニュータウン（高美が丘）がその後完成しているので、赤瓦の割合の一層の低下が予想される。

大字別に見ると、さらに大きな地域差がある。最も赤瓦率が高い地区は高屋町大島地区（80/119戸、67.2%）であるが、赤瓦率60%以上の地区は決して少なくない。他方、赤瓦の割合が低い地域は西条駅周辺の市街地（スプロール地区）と一致する。古くからの集落が少なく、商業施設や新興住宅地のある地域である。

このように全建物に占める赤瓦の建物の割合にはかなりの地域差があるが、都市化の進む中でも多くの地区で赤瓦景観が存続している。そこで、東広島市の赤瓦景観を存続させている要因を、岡橋（1995）の景観の存立構造の図式に沿って整理してみよう（第4図）。

赤瓦は第4図の景観形態にあたる。それは、自然環境をはじめとした東広島市の地域性のもとで、この地域での赤瓦の製造と地元での屋根材のニーズという、生産と消費の二つの機能的側面からまず成立した。釉薬を掛けて焼く赤瓦は、焼き上がると表面がガラス化し、ツルツルと光沢



第4図 東広島市における赤瓦景観を支える構造

が出、滑りがよい。厳冬期に割れる心配がなく、雪滑りがよいなど、寒冷なこの地域に適していた。他の色の釉薬瓦の開発が遅かったため、自ずと赤瓦が一般的となった。石州瓦職人の来訪などにより、1800年代後半にはこの地域で赤瓦の製造がさかに行われるようになったという。

脇本（1998）によれば、赤瓦の普及過程は次のようである。東広島市における民家の瓦葺きは明治末から昭和初期にかけて一気に広まった。それ以前から瓦葺きの家屋が多かった旧山陽道沿いなどの市街地では素焼きの黒い瓦であったが、この瓦は寒さに弱かったため、昭和初期になって地元で焼いた赤瓦を葺く家が多くなった。一方、農村部では昭和も戦後まで藁葺きの農家が見られ、瓦の普及は遅かったが、その分、初めて葺く瓦は、地元で製造した赤瓦となった。赤瓦は寒さに強く、雪滑りもよいという情報が流布することにより、多くの農家が赤瓦を葺いたという。また赤瓦は値段が黒瓦よりも高価だったため、立派な家を建てたということになり、裕福さの象徴でもあった。また、東広島市周辺の民家は「居蔵造り」と呼ばれる重層入母屋造りだが、この建て方が明治中期に流行し瓦葺きを普及させたと言われている。以上のように、現在この地域の景観を特徴づける赤瓦景観は、わずかここ6～70年程度の間でできたものである。

2. 赤瓦景観のイメージと評価

前章と同様、SD法を用いて、東広島市の赤瓦景観についての住民の評価を調べた。第5表がその結果である。強い肯定的評価を得たものを中心にまとめていくと、赤瓦の景観は、総じて、美しく、なじみのあるものであり、農村的で、明るい雰囲気を持ち、魅力的であり、立派なものであると評価されている。以上に比べると、残りの3項目はやや決定的評価を欠くが、いろどり豊かで他にはないという評価が、いろどり乏しくどこにでもあるといった評価を上回っている。最後に、快適か不快かについては、判断留保が60%を超えるが、やや快適な方に傾いている。不快とするものが極端に少ない点は注目してよい。

第5表 東広島市の赤瓦景観についての住民のイメージと評価

単位：%

	1. かなり	2. やや	3. どちらでもない	4. やや	5. かなり	
美しい	37.6	34.2	26.5	1.7	0.0	見苦しい
なじみのある	50.4	22.6	19.1	6.1	1.7	なじみのない
都市的な	5.3	6.2	20.4	29.2	38.9	農村的な
明るい	27.0	32.2	34.8	5.2	0.9	暗い
魅力的な	24.1	25.0	38.4	9.8	2.7	つまらない
快適な	19.5	16.8	60.2	2.7	0.9	不快な
立派な	26.8	27.7	38.4	5.4	1.8	つましい
いろどり豊かな	17.1	24.3	46.8	9.9	1.8	いろどりに乏しい
どこにでもある	13.6	11.8	27.3	31.8	15.5	他にはない

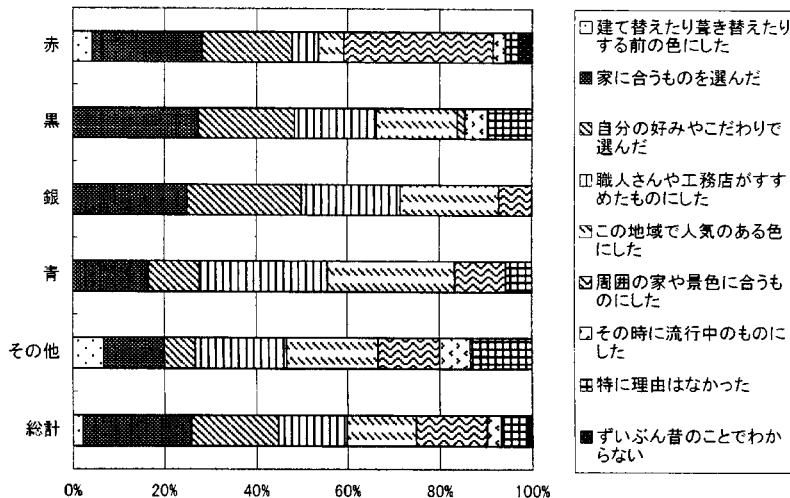
注：設問「あなたは東広島市の赤瓦屋根の景観をどのように評価していますか。下の対になった8つの形容詞による尺度を用いてお答え下さい。」20%以上の数値に下線を付した。
資料：筆者実施の「東広島市の景観とその保全・整備に関するアンケート」（1997年3月）

次に自由記述式の回答から、住民が赤瓦景観に対してもつイメージを探りたい。まず肯定的なものでは、第1に景観としての美しさや魅力をあげるものがある。「日本的で山の緑と合うと思う」、「赤（瓦）、白（壁）、緑（田・松）のコントラストのある大規模パノラマ風景」など、こうした評価は多い。第2には、心象的なもので、子供の時からの原風景であるとか心の安堵をあげる。「子供の頃から見慣れているので落ち着きを感じさせる」、「旅から帰って赤瓦の色を見ると帰ってきた実感ももてほっとする」、「おちついて心になごみます」などにあらわれている。第3には、機能的な面の指摘がある。建築に合っているとか、寒さに強いという意見である。

他方、否定的な見解としては、第1に画一性をあげるものがある。「赤瓦そのものは美しいと思うが、画一的な赤瓦の家には住もうとは思わない」。第2に近代的住宅との混在によるアンバランスを指摘するものがある。「赤瓦屋根の家屋と同じ敷地に建てられる今風の建物との mismatch がいただけない」とか、「周囲に近代的住宅が建ち、農村の田園風景のポイント的景観が失われた残骸的印象」がこうした意見を代表する。第3には、完全に否定的な見解とは言えないが、赤瓦の家の背後にある格式的意識の存在を指摘するものがある。「農村の格式的な意志がはたらいっていると思う」、「純日本建築的ではあるが、お金持ちの土地持ちの地元の人という感じがします」

3. 屋根材としての赤瓦の選択理由

景観は、単に物的なもので構成されているのではなく、住民の心的な側面を併せ持つ。第4図でいう景観像の存在である。ある景観を好ましいと思う集合的な意識が景観形成の主体の中に存在する時、景観の維持・存続に大きく影響する。



第5図 瓦の色別に見た選択理由

資料：筆者実施の「東広島市の景観とその保全・整備に関するアンケート」（1997年3月）

そこで、赤瓦の家屋の住人が、その瓦を選んだ理由をアンケートから探してみよう。第5図は、瓦の色別に、その色の瓦を選んだ理由をみたものである。全体では、「家に合うものを選んだ」が35%ともっとも多く、「自分の好みやこだわりで選んだ」が28%、「周囲の家や景色に合うものにした」、「この地域で人気のある色にした」、「職人さんや工務店がすすめたものにした」も20%台で比較的多い。これに対し、赤瓦の場合をみると、「周囲の家や景色に合うものにした」が42%に達しもっとも多く、「家に合うものを選んだ」が31%、「自分の好みやこだわりで選んだ」が25%でそれに続く。赤瓦の場合は周囲の家や景色に合うことが強く意識されていることがわかる。

赤瓦を選んだ理由を、自由記述式で尋ねてみた。まず、多く見られるのが、「昔から使われていたから」、「伝統的なもの」、「生まれたときから赤瓦」のように、生まれる前からあった伝統的なものとしての捉え方である。「離れが赤瓦。無意識に」、「納屋も赤瓦なので母屋も同じにしました」のような回答もそれを裏付ける。このような意識はさらに地域の色として当然という認識にも発展する。「この地区が赤瓦だから」、「この付近では当然だから」、「地域での色に合わせた」、「近所と同じに」、「地区の周囲の家及び景色に合った赤瓦に決めました」といった具合である。寒さに強いとの理由も多い。「寒冷による凍み割れしないため」、「耐寒性がある。本瓦により何時までも変わらない」、「油瓦につき積雪があっても、積もりにくく、また、溶けて落下が早い。」などである。ただし、こうした認識は、自ら確かめたものではなく、「冬の寒気でも凍らない油瓦と亡き父に聞いている」のように、親などから伝承されたものであることも多い。

個人的に家に合うとの判断は少数派であるが、「家屋にマッチしている」、「白壁と良く合い、落ち着きがあるから。田舎によく似合う」、「赤瓦は落ち着いていて心に和みます」などである。一方、「地域に昔から赤瓦の業者が多かったですので、皆さんほとんどの家で赤瓦をふいて居ります」、「この地方産は赤瓦より外になかった」といった、供給面の条件まで言及しているものは意外に少ない。

4. 赤瓦景観の存続要因と今後の展望

以上の検討から、個人の内面にあつて赤瓦景観を存続させるように作用している住民の景観像とは、「赤瓦は伝統的で自分が育ってきた原風景であり、しかも機能的に寒さに強い」というものである。赤色以外の釉薬瓦（石州瓦）が開発されても、赤瓦普及当時と言われた「黒瓦（素焼き）よりも赤瓦は寒さに強い」、「赤瓦は雪滑りがよい」といった情報が根強く残り、既にみたように現在でも瓦を選ぶ際の理由に挙げられている。それは、赤瓦でなくとも耐寒性のある瓦が存在する現在では、まさに神話と化していると言えよう。また、こうした景観像が広くこの地域の住民に共有されていることも重要である。脇本（1998）の述べるように、「黒瓦は変わり者」と言われるなど、赤瓦以外を葺きにくい雰囲気も存在するようである。この点は、先のアンケート結果でも示され、赤瓦の選択に当たりまず周囲との調和を優先するメンタリティが存在する。さ

らに、裕福な農村地帯であるこの地域の人にとって、高価な赤瓦を葺いた白壁の本造り住宅は、その裕福さの象徴でもあった。つまり、現在まで赤瓦景観が維持されてきたのは、昔からこの地域に住んでいる地元住民の強い支持があったからである。

この点は第6表からも確かめられる。赤瓦の採用者は東広島市内の出生者、つまり元からここに住む旧住民が約80%を占め圧倒的に多く、広島県でも他地域出身者では赤瓦の採用はかなり少なくなり、県外出身者となると赤瓦はわずか10%程度に過ぎない。それだけに他地域からの人口の流入が進み、住宅が増えれば増えるほど、赤瓦の家屋の比率は急速に低下していくことになる。また、こうした赤瓦景観への指向は、年齢が下がるほど弱くなる傾向がある。たとえ地元出身者であっても、若い世代では価値観の変化により赤瓦への考え方が変化してきているようにみえる。実際、在来の農村集落であっても赤瓦以外の瓦が増え、モダンな洋風建築が進出しており、生活様式や住宅に対する好みの変化を感じとることができる。このような状況の中で、赤瓦に強い愛着をもつ住民であっても赤瓦景観の衰微を半ば時の流れと捉えているように思われる。実際のところ、こうした景観を維持しようとする住民の積極的な動きはみられない。

第6表 回答者の出生地と自宅の屋根瓦の色との関係

	東広島市	賀茂郡	広島市	その他広島県内	県外	総計
黒	10	3	3	11	11	38
銀	5		4	3	2	14
赤	40	4	1	6	2	53
青	5	1		1	1	8
緑			1			1
白	1		1		2	4
その他	3			1	5	9
総計	64	8	10	22	23	127

資料：筆者実施の「東広島市の景観とその保全・整備に関するアンケート」（1997年3月）

V. 景観保全に対する住民意識と景観政策

1. 東広島市の景観政策

東広島市が景観を政策課題として認識し始めたのは、1980年代のことであろう。東広島市総合計画（第1次改定）（1986年策定）において、これまでのハード事業に加えて、美しいまちづくりなど、市の特色を出すソフト事業に着手しなければならない時期がきたとし、市独自の景観である赤瓦に注目している。岡橋（1996）で述べたように、この時期には一部の都道府県や市町村で景観条例を制定し、熱心に景観政策に取り組むところが現れた。そうした先駆事例に影響されて全国的に景観行政への関心が高まったが、東広島市でもこうした全国的動きにそって、景観が施策の中に取り込まれるようになった。

2010年を完成年度とする第3次東広島市総合計画（1994年策定）になると、潤いにみちた生活環境づくりの章で「居蔵づくりと農家の赤瓦」と「ため池」を市独自の景観美とし、それらを維持しながら、自然と調和した美しいまちづくりを目指す、との記述がみられる。しかし、計画書の「美しいまちづくり」では、緑化や自然環境の保全・活用についての項目だけで、「居蔵づくりや農家の赤瓦」をどう維持するかについては立ち入った記述がない。そうした中で、東広島市景観条例の制定を検討するとしている点は注目される。

2001年策定の東広島市都市計画マスタープランでは、自然環境の保全・良好な環境形成の一貫として都市景観の形成をとりあげ、景観政策に一定のウェイトが与えられている。景観形成の基本方針としては、西条四日市、白市地区等の歴史ある伝統的まちなみ景観の保存と活用、特徴的な赤瓦の集落・田園環境の保全と調和、駅前などの新都市景観の創造、地域景観として重要な自然環境・自然景観の保全、河川・ため池・滝などの水景観の保全と活用、点在する景観資源を景観軸により有機的に結ぶ景観ネットワークの形成、快適な都市生活環境づくりのための景観の指導・誘導、以上7項目が掲げられ、地域景観の複合性に対応した多面的な提案がみられる。また、景観形成地区として、歴史的まちなみのある地区をはじめ、先導的に景観形成を進める必要のある地区では、住民合意に基づくルールづくり等を検討するとしており、景観政策として一歩踏み込んだ方向が示されている³⁾。

以上のように、景観政策に関して行政の関心は高まってきたが、実際には規制を伴う景観条例は未だ実現しておらず、これまでの主な成果は、小学校や公民館などの公共施設への赤瓦の採用にとどまる。脇本（1998）によれば、初めて公共施設に赤瓦が葺かれたのは、1981年の市立磯松中学校であり、以来屋上を利用しない施設に赤瓦を葺くようになったという。1996年までに、赤瓦が葺かれた公共施設は、市立小学校7校（全20校中）、市立中学校3校（全8校中）、市立公民館6館（全17館中）に及び、さらに国や県などの公共施設（広島大学、西条警察署、県農業技術センター、山陽新幹線東広島駅など）でも採用がみられる。このように公共施設への赤瓦の採用はワンポイント的であるが、地域景観に一定の影響を与えている。

2. 赤瓦景観の保全への意識

公共施設（学校や公民館等）で赤瓦を用いる東広島市の取り組みは、住民にどのように評価されているのだろうか。第7表からは、回答がかなりばらついていることがうかがわれる。つまり、よく知っている人とまったく知らない人がともに30%強あり、両極に分化している。しかも調査対象の3地区の間にあまり差がない。

赤瓦の景観を維持し、町づくりに活用するという取り組みについては、基本的に賛成とする者が多い。今回のアンケートでは、「大いに賛成」が38%、「どちらかといえば賛成」が31%あり、合わせて70%近くにも達する。これに対し、「まったく反対」はわずか2%、「どちらかといえば

第7表 公共施設（学校や公民館等）に赤瓦を用いる取り組みへの認知度

		よく知っている	少し知っている	あまり知らない	まったく知らない	計
西条中央	人数	18	6	8	18	50
	構成比 (%)	36.0	12.0	16.0	36.0	100.0
下見	人数	12	6	7	16	41
	構成比 (%)	29.3	14.6	17.1	39.0	100.0
郷曾	人数	10	9	8	9	36
	構成比 (%)	27.8	25.0	22.2	25.0	100.0
不明	人数	1				1
総計	人数	41	21	23	43	128
	構成比 (%)	32.0	16.4	18.0	33.6	100.0

注：設問「東広島市では、美しい町づくりのため「居蔵づくりと農家の赤瓦」を市独自の景観として維持する施策を進めています。そのために、東広島市は公共施設（学校や公民館等）に赤瓦を用いる取り組みをしていますが、ご存じでしたか？」
資料：筆者実施の「東広島市の景観とその保全・整備に関するアンケート」（1997年3月）

反対」も12%に過ぎない。

問題となるのはそのように考える理由である。賛成の場合には、個別的な意見を除くと、地域の個性や特色、地域景観の統一性、郷土の誇りなど、地域の伝統に関わらせてその重要性を主張する。これに対し、反対の理由では、そもそも赤瓦にこだわる必要がないとの意見が多い。その根拠としては、土着以外の人が増えている、時代の流れである、民家の屋根を同じにする必要がない、色を統一することにより家の外観等も自由度がなくなる、瓦の維持費が高い、などがあげられている。このように整理すると、この賛否には地域への愛着度がある程度働いているようにみえる。

ここで赤瓦に限らず地域の景観をよくする整備事業について問うてみた。第8表のように、美しい景観づくりを行うべきとする意見は90%以上に達する。しかし、各論として住民による協定や行政による規制を行ってでもやるべきというのは30%に満たず、規制を伴わない範囲で行うべ

第8表 農家・非農家別にみた景観づくりへの見解

		住民による協定や行政による規制を行ってでも、美しい景観づくりを行うべき	規制を伴わない範囲で美しい景観づくりを行うべき	このままでよく、美しい景観づくりの必要はない	何とも言えない	総計
農家	人数	8	33	2	2	45
	構成比 (%)	17.8	73.3	4.4	4.4	100.0
非農家	人数	26	45	0	4	75
	構成比 (%)	34.7	60.0	0.0	5.3	100.0
不明	人数		3			3
総計	人数	34	81	2	6	123
	構成比 (%)	27.6	65.9	1.6	4.9	100.0

設問：「赤瓦に限らず地域の景観をよくする整備事業について、あなたはどのようにお考えですか？」
資料：筆者実施の「東広島市の景観とその保全・整備に関するアンケート」（1997年3月）

きとする者が60%を超える。この回答を農家・非農家別にみると、規制派の割合が非農家では30%あるのに対し、農家では17%にとどまる。実際に土地を所有している農家層にとっては私権の制限となる規制は同意が得にくいのかもしれない。また、このような規制をしてでも景観づくりをすべきかどうかという見解は、コミュニティに関する考え方も関連しているように思われる。ちなみに、「町内会の仕事や催しに積極的に協力すべきだ」と考えるグループでは規制派が半数を占めるのに対し、「協力した方がよい」とするグループでは規制派が約20%に落ちる。

3. 景観政策の今後のあり方をめぐって

東広島市における景観政策の今後の方向性を、アンケートの自由記述欄（東広島市の景観について守っていくべきものや方法について意見を求めた）によりながらまとめておきたい。まず次の二つがある。

一つは、現在の自然にめぐまれた状況を維持しようとするものである。特に乱開発の防止を訴える意見は多かった。「自然がまだ残されており、ゆったりした居住空間があるので、是非この状態が守られればよいと思っています。市街化調整区域のあることは聞いていますが、将来人口増加に伴い自然環境も次第に悪くなると考えられますので、できることであれば、住宅は増やさない方が賢明ではないかと考えます」（男、50歳台、県外出身）。

二つ目は、一定の開発を行いながら新たな景観を創出しようという考え方である。道路や下水道などインフラ整備を求める意見も多い。「どこにでもある自然を残すだけがベストではないと思う。田舎の自然は全国どこにでもある訳で、よそから人が景観のすばらしさを見にくるような景観にすべきだろう。ステキな街と田舎の自然がいっぱいある街とはちがう」（男、40歳台、東広島市出身）

しかし、景観政策は自然を残すか開発かという二元論では終わらない。この点、次の意見は傾聴に値する。「赤瓦景観が都市化とともに周囲とミスマッチしたように思われる現在、もし守るならば建築様式や都市計画を十分に考える必要があると思います。そうでなければ、赤瓦景観の保存は単なる守旧派のヒューマニズムに終わるかも」（男、50歳台、東広島市以外の広島県内出身）。東広島市の都市化の現状を考えると、赤瓦景観にせよ、自然景観にせよ、現状のままを維持することは不可能である。それゆえ、保全と開発の明確な地域的ゾーニング、赤瓦景観が保全できる地区の設定、赤瓦が生かせるモデル農村地区の指定と保全などが今後の検討課題として浮かび上がってくる。さらに、急速に都市化が進む地区では高層建築物の高さ規制や広告看板などの規制も課題となろう。

景観政策が行政主導から抜け出すには、景観への住民意識を高めていくことが必要である。住民の関心を高め、主体的な参加をうながす方策を示した下記の意見は傾聴に値する。

「景観について市民の意識向上のためのセミナー、討論会などを繰り返し持つていく。地域の

レベルを向上していく」(男、40歳台、東広島市以外の広島県内出身)。「小手先の景観整備事業ならしない方が良い。屋根の色にこだわるのではなく、もっとデザインのすぐれた建物が多くなるようにコンペをしたり、優秀なデザイン建物を表彰する制度を作ったり、幅広く」(男、40歳台、東広島市以外の広島県内出身)。

VI. おわりに

景観は多くの場合、常に変化し続けていく。それゆえに、ある景観を維持しようとするればそれなりの困難をとまなう。わが国ではこれまで、そうした流れに逆らえず、保全すべき景観が破壊されたケースが少なくなかった。しかし、景観法の施行により状況が変わり、良好な景観の保全や形成を地域が主体となって行いうる可能性が生まれてきた。

東広島市のように都市化が急速に進行する地域で、景観を保全することは容易ではない。本稿では景観法が有効に機能するための地域の内的条件を、住民の景観評価や景観意識などの面から検討した。その結果、住民間に共通の評価や意識が存在するとともに、異なる多様なベクトルがあることも判明した。赤瓦景観の場合も住民の間で評価は分かれる。しかも、それに高い評価を与える場合でも、積極的な保全運動を行うに至っていない。さらにそれを維持するための規制の実施となれば否定的見解の方が多かった。それゆえ、単純な規制論だけでは東広島市の景観は守れないことは明らかであろう。景観政策を推進するには、まず、このような事実をふまえた上で住民間の対話を深めていく作業が求められる。この点で、景観に関する意識を高め理解を深める多様な学習の場の創出が急がねばならない。

景観の問題は広く地域づくりにつながる。岡橋(1995)で述べたように、景観の概念は単に目に映ずる「地域の可視的・形状的側面」だけでなく、本来「地域の総合的内容」を含んでいる。それゆえ、景観から地域づくりを考えることは、目に映ずる景観にとどまらず、それを軸として地域を全体的に捉え、また地域の様々な要素を総合的に関連づけていくことにつながる。つまり、景観を手がかりとすることで、それまで十分意識されなかった、地域と地域、人間と自然、そして人間と人間、といった結びつきが見えてくる。景観は様々なものをつないでいく働きがあり、そこにたとえ希少性がなくとも景観から地域づくりを考えていく大きな意義があるといえよう。

付記

本研究のアンケート実施に当たっては、平成9年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「日本農村における景観整備の展開とその論理」(研究代表者：岡橋秀典)を用いた。アンケートに熱心にお答えいただいた方々に御礼申し上げますとともに、論文による公表が遅くなったことをお詫び申し上げます。また、東広島市都市計画課からは政策に関する資料を提供していただいた。本稿では十分言及できなかったが、さらなる検討は今後の課題としたい。

注

- 1) 東広島市は2005年2月、周辺町村と合併したが、本稿では調査をそれ以前に実施しており、合併前の範囲を対象とする。
- 2) 「その他」としてあげられたのは、真壁造りの日本的建築、大学通り、鏡山城址、又は竜王山頂からの眺望、近代道路と農村の景観、下見の池。
- 3) 現在、東広島市における景観政策で具体的成果をあげているのは、白市地区と酒蔵地区である。前者では、平成9年に「白市地区景観形成委員会」が住民により結成され、まちづくり活動を続けた結果、15年に「東広島市白市地区景観形成要綱」が施行された。平成16年度からは「街なみ環境整備事業」により景観整備などが行われている。また、後者の酒蔵地区では、平成14年から「酒蔵地区まちづくり協議会」が設立され、中心市街地活性化と関連づけてまちづくり事業が行われている。景観形成にも一定の配慮がなされている。ただし、両地区とも景観法に対応した動きは今のところみられない。

文 献

- 岡橋秀典（1995）農村と景観—ルーラルデザインの可能性をさぐる。中越信和編『景観のグランドデザイン』共立出版、128-155ページ。
- 岡橋秀典（1996）今なぜ景観か—問題提起として。地理科学51-3、pp.3~11.
- 都市環境研究所（1980）『広島大学統合移転キャンパス周辺地域基礎調査報告書』。
- 山本一馬・大石洋之・村川三郎・西名大作（2005）東広島市域における地域住民の景観選好特性に関する研究。日本建築学会環境系論文集587、pp.53-61.
- 脇本昌子（1998）『赤瓦景観の存続とその基盤—東広島市を事例として—』広島大学文学部1997年度卒業論文。

Inhabitant's Consciousness to the Local Landscape and the Conservation Problem in Higashi-Hiroshima City : with Special Reference to the Landscape of Red Roofed Farmhouses

Hidenori OKAHASHI

In recent times, landscape policy comes under the spotlight, because the landscape law was newly enacted by the Central Government in 2004. It becomes problematic whether the landscape law will have a beneficial effect in carrying forward the landscape conservation policy. Therefore this paper intends to clarify the local inhabitant's evaluation of the surrounding landscapes and their opinion to the landscape conservation by employing a method of questionnaire survey. The study area is Higashi-Hiroshima City, in which rapid urbanization is going on in recent times.

As a result, it is revealed that the local residents have common dimensions in evaluating the landscape. However there are some diversities in opinions for the landscape conservation. Therefore, it is very difficult to realize the conservation of red roofed farmhouses, though the landscape itself is highly evaluated by the local residents. For promoting the landscape conservation policy, the opportunity for learning and discussing on the landscape issues should be provided by the local authority (Higashi-Hiroshima) and non profit organizations (NPO).